

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720331

研究課題名（和文） 複数の調査地域を連環する「映像アーカイブ利用のシステム化」の実践的研究

研究課題名（英文） A practical study of development a model of systematization of image archive using as two or more fieldwork areas are connected

研究代表者

鈴木 岳海（SUZUKI TAKAMI）

立命館大学・映像学部・准教授

研究者番号：20454506

研究成果の概要（和文）：

本研究により、研究者と調査対象者による映像制作手法の開発に関して、ローカルな知識に関するアーカイブ映像を制作する際に、市民に向けた制作指針の作成の必要性とその効果を明らかにした。また、複数の調査地域の人々をつなぐ「映像アーカイブ利用のシステム化」のモデルづくりにおける手法と成果が、地域社会だけでなく、人文・社会・情報科学研究や芸術実践に応用できることが共有され、領域横断的な実践研究の基盤となった。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I have developed a model of systematization of image archive using as two or more fieldwork areas are connected. A guide prepared in collaboration with a people of fieldwork areas in this model has a significant beneficial effect on making archived video packages. In addition, the results and methods of study confirmed sharing with local community and becoming the basis of cross-disciplinary practical study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：メディア、知の共有、映像制作、映像アーカイブ、映像人類学

### 1. 研究開始当初の背景

日本の人文・社会科学研究においては調査研究と研究においては文字による研究の蓄積と発信が主たるものとなっている。一方で、撮影・編集機材の普及により、映像制作の裾野は放送局から一市民にまで広がったと同時に、増加する映像を集積し、多角的に利用できる「映像アーカイブ」は、世界各国の政府機関や各種報道機関、インターネット放送局、

そして個人単位でのアーカイブ構築へ展開している。このような状況を受け、くわえて質的調査の重要性が再認識されてきたことから、対象へのアプローチ手法や研究成果の表現媒体として映像が利用されるようになってきた。しかしながら、研究者と調査対象者が映像を共有する研究はきわめて少ないことに変化はない。

その中でも、研究活動の映像記録や研究対

象の映像記録として集積、整理する映像アーカイブ化について、研究対象の生活記録やインタビュー、過去の映像資料を研究資料とする社会学や民俗学、文化人類学に多く見られる。一方、オーラルヒストリーの映像記録を資料とする歴史学や経済学、政治学でも広く扱われる研究である。また、研究過程と成果を映像として公開する手法として映像アーカイブを利用した研究事例が散見される。

端緒についたばかりの映像を利用した調査研究における情報共有に関して、映像を利用することで体系的な知をもつ研究者とローカルな知を継承する調査対象者とが横断的・有機的に関わりの方策をさぐる実践もなされてきた。また、専門領域のみに埋没しがちな研究システムを地域や社会に還元しようとする試みも見られるようになってきた。

これらの実践的な研究のひとつとして、本研究プロジェクト代表者がおこなった、平成19-20年度科学研究費補助金(若手研究スタートアップ、代表鈴木岳海)「研究者と調査対象者による、映像記録制作手法の開発と『映像アーカイブ化』の実践」では、京都市静原の地蔵盆行事を中心とした年中行事の映像を調査地域の人々とともに行事を実践しながら、映像に記録・上映をおこなった。その中で、とくに現代の大人と子供との関係、地域社会にみられる人々の関係性が明らかになるとともに、映像利用により得た成果が3つあった。(1)映像利用により、調査対象者が新たに具体的な視点を研究者とともに獲得し現在起きている問題へ対処する契機となった。(2)研究成果を映像作品として地域住民が分かりやすい形で提示できた。(3)他地域の地蔵盆を扱った映像作品を上映した調査では国内における年中行事だけでなく、本研究申請者が行ってきたネパール調査での事例にも非常に大きな関心を示し、地域社会への知的貢献に少なからず寄与できた。

本研究は上記の成果である実際の・通文化的な映像利用のシステム化の必要性を背景としている。

## 2. 研究の目的

本研究は、研究者が調査地域の人々と具体的に現れたローカル知を映像によって記録し、映像記録をアーカイブ化することで、地域社会を住民自らの手で再定義しなおし、映像を連環的に利用することで自身の社会と文化を通文化的に位置づけることを目指すものである。さらに、映像アーカイブにより複数の調査地域の人々が相互にローカルな知を編成・共有する本研究の取り組みは、映像のもつ共有性と人々を結ぶ媒体としての映像の可能性を活かした研究者と複数の地域を相互につなぐ連環的研究と想定される。

このような方向性のもと、本研究の目的は、

研究者と調査対象者による映像制作手法の開発と複数の調査地域の人々をつなぐ「映像アーカイブ利用のシステム化」の実践をおこなうことにより、本研究では、研究者と複数の調査地域の人々が、研究成果を連環的に相互利用できる有機的な調査モデルづくり試行することにある。

具体的には、現代の京都市静原とネパール・カトマンズ、スペイン・バレンシアを対象として、信仰と生活が溶け込む年中行事が各地域や人々にとってどのような意味があるのか、文化人類学的調査を時系列的な比較分析の視野も入れながら検討することから、以下の3つを研究の目的とする。

(1) 環境と文化が異なる京都市静原とネパール、スペインにおける各都市の年中行事、特に火の祭りを中心とした社会組織の変容に関する時系列的比較を視野に入れた地域の映像記録の発掘をおこなう。

(2) 火の祭り調査における映像制作の実践と映像アーカイブ化

(a) 調査対象との共同映像制作

研究者と調査対象者が共同して映像を記録することで両者が新たな課題を発見するコミュニケーション・ツールとしての共同映像制作を実践する。

(b) 映像のアーカイブ化

研究者と調査対象者とが共同で制作した映像資料や映像作品といった研究成果を映像アーカイブ化することを試みる。

(3) 複数地域におけるローカルな知の共有とシステム作り

通文化的な視点の獲得と相互理解の深化を機能とする映像アーカイブをもとにローカルな知を共有する映像アーカイブ利用のシステム化を構築する。さらに、人文・社会科学の研究領域を広く社会に開かれた形とするため、先駆的な取り組みの視察を通してシステムの提案をおこなう。

## 3. 研究の方法

(1) 調査対象に関する文献資料と映像資料の収集、整理

3つの調査地における年中行事に関する記録の収集と整理をおこなう。現代における年中行事の役割や社会組織の変容、地域社会に根付いた行事の社会的意味合いに関する資料と先行研究を整理し、映像を利用した本研究の意義を明確にする。京都市静原の映像資料は、立命館大学映像学部学部長大森康宏が記録した映像資料を中心に整理し、時系列的比較分析をおこなうことで、静原がもつ現在の問題をより明確にする。

(2) 地域住民と映像を利用した共同調査

本研究申請者と京都市静原、ネパール、スペインにおける調査地域の住民とが、映像を「記録」と「コミュニケーション」の手段と

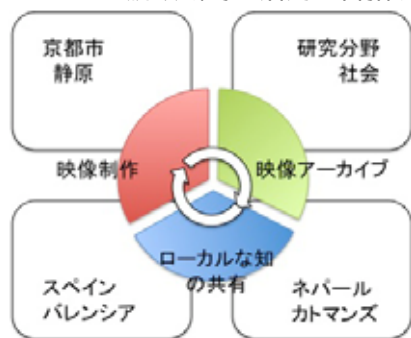
して利用し、調査研究を共同でおこなう。さらに、通常の調査にはない、地域の人々の視点から記録したものや調査対象者が本研究申請者を取材するような撮る側/撮られる側との関係の相互影響を記録するといった実験を試行する。

そこでは、映像を利用した共同調査とその技法の確立もはかれる。とくに、3地域の調査対象者とともに調査を通して、映像を記録し意見交換をしながら情報を共有する。このことから、新たな情報と課題が集まり、調査研究から映像記録を介して地域住民、複数の地域住民へと常にフィードバックする。このような展開を経ることで、地域住民や地域の活動へ利用されるような「暮らしを豊かにするツールとしての調査研究と映像記録」として地域に還元される連環型システム構築へと研究が展開すること志向する。

### (3) 映像アーカイブの連環的利用のシステム化の推進

研究者と調査対象者による映像をアーカイブ化することで、3つの地域住民が連環的に地域の年中行事の分析をおこない、互いの文化を通文化的に位置づけるシステムの構築を試行する。また、システム化の推進のために研究者や関係機関等と情報交換をおこなう。また、地域住民と連携した映像アーカイブの構築とローカルな知を共有し、複数地域との連携の中で記録された映像情報を体系化したアーカイブとして構築する。これにより、映像情報によって新たな視野を得た地域住民にとって、それぞれの「場」で継承されてきたローカルな知識を共有する新たなシステムづくりを目指す。

さらに、対象となる地域を超え、社会への還元と人文・社会科学における有機的な映像利用のシステム化を提案し、映像アーカイブを研究機関や教育現場、諸地域の情報蓄積に関わる第三者機関でも活用できるように社会に還元する。くわえて、映像制作から知識共有まで一貫したシステムが、人文・社会科学の研究において有機的に効果することを理論的・実践的に提案する。システム化に関しては、海外での事例研究と本研究申請者が所属する立命館大学映像学部が多様な映像文化を専門分野とする研究者と実質的な議論をおこない脱領域的な活用も目指す。



## 4. 研究成果

本研究の目的は研究者と調査対象者による映像制作手法の開発と複数の調査地域の人々をつなぐ「映像アーカイブ利用のシステム化」のモデルづくりをおこなうことであり、4年間の研究実践において以下の3つの具体的な成果をあげた。

(1) 現代の京都市静原とネパール・カトマンズにおいて、過去の儀礼との時系列比較を目的とする調査と映像記録をおこない、宗教信仰と生活が溶け込む年中行事が政治的、歴史的、社会的にことなる状況にある一方で、村落における住民の所属意識と役割分担の意識の変化、その背景にある都市部と村落をつなぐ環境の変化、さらに住民の社会関係の変化のもと、儀礼の意味を読み替え、新たな行為に書き換えながら伝統的な祭りや行事の維持している状況が両地域に見られることを明らかにした。

(2) 比較調査のために、調査対象と共同して映像を記録し、ローカルな知識を共有する映像アーカイブ利用のシステム化のモデルを実践した。とくに、3年間にわたる京都市内の無形文化財である剣鉾祭りの記録と映像アーカイブ化の試みのなかで、地域文化をアーカイブ化する際の映像制作に関する諸課題、とくに多人数における撮影者に向けた制作指針の作成から修正を循環するシステムを仮構し、システムの実践からその効果を明らかにした。

(3) 地域文化の映像アーカイブ化のプロセスの中で、諸地域の人々と映像を媒介としてローカル知の共有をおこなった。また、地域社会だけでなく、人文・社会科学的調査研究に還元することで、諸領域におけるアーカイブ映像がもつ特性を共有することができた。さらに、CGアーカイブ領域やインタラクティブアート領域との横断的な研究への端緒となる研究成果の基盤となった。

上記の成果から、本プロジェクトは映像アーカイブ化とそのシステム化を通して、研究者と調査対象や、地域や研究領域を循環する有機的な映像利用のシステム化のモデルの事例を提示することができた。

本プロジェクトの研究成果は、以下の形で論文、報告として発表された。

(a) 調査撮影において年中行事で見られる身体技法をとらえる際に、モーターハビット概念をその指針とすることがきることの有効性を論文として明らかにした

(b) 日本の映像人類学の現状と今後の展開について、本研究にも触れながら民族誌映画制作を中心に考えるワークショップにて、映像

記録の意義を報告した。

(c) 調査撮影において年中行事をとらえる際に必要な、多様な感覚に意識することの重要性と、視覚だけではなく、多感覚的な表現を取り入れることの重要性を明らかにし、その応用としての教育手法開発とその有効性に関する論文として報告した。

(d) 映像アーカイブ化に向けて、地域文化の比較を目的としたアーカイブ映像制作について、京都市内各地でおこなわれる剣鉾祭礼を対象として、その制作過程で確認された課題を明らかにし、アーカイブ映像の制作に必要な対応策を提示し、撮影から映像作品の完成を見通したとくに撮影内容のフォーマット化の意義について論文で述べた。

(e) 相互作用関係の構築のプロセスを参与観察と、フィールドの日常生活を意図的に操作することなく対象となる個人や集団の偶発的な行為や発言、出来事などの質的データを映像記録する手法が、ケア現場で制作されるインタラクティブアート制作の過程で効果があることを明らかにしたことを研究会での報告と論文で発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

鈴木岳海、地域文化のアーカイブ映像における映像制作の諸課題について 京都、剣鉾祭礼を対象とした映像制作を事例として、立命館映像学、査読有、6巻、2013、未定

目次護、望月茂徳、鈴木岳海、ケアとインタラクション: 育児・介護現場におけるインタラクティブアート制作の試みについて、情報処理学会研究報告、研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション、査読無、HCI-150(14)、2012、1-6

鈴木岳海、感覚横断的映像教育手法としてのワークショップ開発に関する一考察

・2007年から2010年にわたる映像学部学生を対象とした夏期ワークショップの事例から、立命館映像学、査読有、4巻、2011、19-29

鈴木岳海、モーターハビット概念の表現におけるクローズ・アップ映像の意義・菓子制作過程における菓子職人の映像から、立命館映像学、査読有、3巻、2010、57-69

[学会発表](計3件)

発表者名: 目次護、望月茂徳、鈴木岳海、  
発表課題: ケアとインタラクション: 育児・介護現場におけるインタラクティブアート制作の試みについて、学会名等: 情報処理学会研究報告、第150回 HCI・第36回 UBI 合同研究発表会、発表年月日: 2012年11月2日、発表場所: お茶の水女子大学(東京都)

発表者名: 鈴木岳海、発表課題: 剣鉾データベース映像の課題について、学会名等: 京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会、発表年月日: 2012年2月20日、発表場所: 立命館大学(京都府)

発表者名: 鈴木岳海、発表課題: 日本の映像人類学の将来・民族誌映画制作を中心に、学会名等: 学術映像博2009、ワークショップ「日本の映像人類学の将来・民族誌映画制作を中心に」、発表年月日: 2009年9月26日、発表場所: 京都大学総合博物館(京都府)

[図書](計0件)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木 岳海 (SUZUKI TAKAMI)  
立命館大学・映像学部・准教授  
研究者番号: 20454506

##### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号: